

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

特集

「海外留学」を考える
～外国で学ぶことの意義と課題～

●同志社人訪問

Jリーグ・京都サンガF.C. オフィシャルカメラマン

神崎 順一さんに聞く



『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。



特集

「海外留学」を考える ～外国で学ぶことの意義と課題～

2

ゼミ探訪 学びの時間

9

理工学部 電子工学科 佐々木和可緒 研究室

同志社の研究は今

11

健康体力科学研究センター 藤澤義彦 スポーツ健康科学部教授

来年度就職をめざす皆さんへ

13

CAMPUS NEWS

15

新キャンパスに関する共同記者会見が行われました！／創立135周年記念展示企画展を開催／「京都学生人間力大賞」を本学大学院生が受賞！／準硬式野球部、全日本大学準硬式野球選手権大会で優勝／同志社大学西北ネパール登山隊 ヒマラヤ山脈未踏峰チャムラ登頂に成功／硬式野球部、関西学生野球リーグを2季連覇／同志社京田辺祭2010／第38回 Neesima Room企画展「幕末と同志社―薩摩藩邸址にあって―」／今年度の新司法試験結果について／本学教員執筆図書紹介／『続 マンガで読む新島襄～日本初の私立大学設立への挑戦～』を刊行！

留学生紹介

19

マーレン・クリスティン・ベッカーさん(チュービンゲン大学同志社日本語センターに在学)

INTERVIEW ～同志社人訪問～

20

Jリーグ・京都サンガF.C. オフィシャルカメラマン 神崎順一さんに聞く

MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～

23

- ・磯村 義郎さん(2000年商学部卒業)
- ・畠山 真梨子さん(2004年経済学部卒業)

ANNOUNCEMENT

25

MY PURPOSE

27

授業で企画した3Dデジタルカメラが企業の商品に～「できることは何でもやろう」の精神が結実～
日下部 淑世さん(経済学部4年次生)



表紙の情景 [京田辺校地 硬式テニスコート]

授業や課外活動で利用頻度の高いハードコートは、これまでもたびたび部分的な補修を施してきたものの、ひび割れが数多く発生したことにより、2010年夏に全面的な改修を行った。ハードコートは、セメントやアスファルトの基礎部分を合成樹脂などでコーティングして造るものだが、この改修で使用したのは、全米オープンテニスでも採用されている「アーマー製」という優れた素材。寒暖の差によるひび割れの伸縮に順応する特殊なテープを何層にも重ねているため、10年以上にわたってコート表面へのクラック発生を防ぐことができる。

「海外留学」を考える

〈外国で学ぶことの意義と課題〉

海外へ留学する日本人学生は、2004年の約8万3,000人をピークに、

2007年は約7万5,000人へと落ち込んでおり、6カ月を超える長期留学も減少傾向にある。

同志社大学は、文部科学省の国際化拠点整備事業「グローバル30」に採択され、さらなる国際化を

推し進める中で、世界各地から留学生を受け入れている。一方で、日本人学生の海外留学にも

積極的に取り組み、短・中期のサマー／スプリングプログラムやセメスタープログラム、

そして長期の派遣留学を通して、多数の学生を様々な国へ送り出している。

海外志向の低下という現状を踏まえ、国際化のフロントランナーとして、

今あらためて留学の意義と抱える課題について考えたい。



経験者が語る「留学のススめ」

「外国語を」学ぶこと 「外国語で」学ぶこと

バヴロスカ●この座談会を通して、留学を思い描く学生たちの背中を後押しするよなメッセージを発信できればと思っています。留学経験者の皆さんはご自分の体験したこと、留学に対する思いを率直に語ってください。まず、自己紹介と併せて、なぜ留学先の国や都市、大学を選んだのかを教えてくださいいただけますか。

森岡●法学部政治学科4年次生の森岡杏です。留学した大学はカリフォルニア大学バークレー校です。政治学のほかに、平和とは、戦争とはという命題について学びたいと思っていて、そのプログラムがあったことが1つ。もう1つは憧れている国際政治学者の緒方貞子さんがバークレー校を卒業されていたことです。

井上●文化情報学部4年次生の井上晃一です。メキシコのラス・アメリカス大学に留学していました。僕の場合は、2年次にサマープログラムでスペインに行っており、

その経験を生かして他の国も見ておきたいと考えたからです。派遣留学の対象国にはメキシコ、アルゼンチン、チリの3国がありました。が、中南米への入り口に当たる場所、文化的にも色々なものが集まってきたらいいだろうと思い、メキシコを選びました。

大谷●グローバルスタディーズ研究科前期課程1年次生、文学部英文学科出身の大谷徳子です。私は留学の時期を重要視しました。4月に出発できることを基準に留学先を探すと、オーストラリアかニュージーランドのどちらかでしたが、心理学系で受けた科目があったので、ニュージーランドのウエリントン・ビクトリア大学を選びました。

バヴロスカ●森岡さんと同じようにコースで選んだということですね。賢明な選択です。

若葉●文学部英文学科4年次生の若葉貴史です。僕は英語の語学研修に行きたかったので、まず2年次でセメスタープログラムに参加。当時は英語の行き先が1カ所のみで、それがカナダのウイニペグ大学でした。次に長期の派遣留学に挑戦したいと思い、カリフォルニアやハワイ

イなど第二言語習得研究の盛んな大学も考えたのですが、カナダの人や都市、文化にとても愛着があり、寮の費用なども考慮して、やはりカナダへ。留学先はビクトリア大学です。

バヴロスカ●私もウイニペグ大学には行きました。カナダは決してアメリカのコピーではないと思います。ではなぜ留学しようと思ったのか、その理由を教えてください。

森岡●私は帰国子女なので、もともと日常生活程度であれば英語を話せますが、政治学の国際関係分野では、英語の文献が非常に多いのです。英語を日常的に使うことと

英語で勉強することはまったく違うと感じ、英語で学問をするという目的で留学を決めました。

バヴロスカ●帰国子女で英語が話せるからこそ、その深さもわかるということですね。なるほど。

井上●僕は大学を出る時に、1つこれはやっていたと言えらるものを作っておきたいと思っていました。学部で日本語教育を学ぶ中で言語に興味を持っていたので、違う国の言葉を覚えておけば、将来その道に進む

森岡 杏さん

【法学部政治学科 4年次生】

国際センター副所長・
言語文化教育研究センター准教授
Susanna PAVLOSKA
(スザンナ・パヴロスカ)



時に役立つと思って決断しました。

大谷●単純に留学したいとは高校生の頃から考えていました。以前はアメリカに憧れていて、外国で暮らし、日本とは違う文化を自分で体験してみたいと思っていました。

若葉●僕は英語が大好きで、中学時代から英語の教員になったかったです。そのためには英語を話せなくてはいけないと思っていましたし、これからの教育も会話を重視する方向へ進んで行くので、大学4年間のうちに留学にチャレンジしようと考えていました。3カ月行ってみて、自分にはさらに磨くべき点があると思い、またカナダのように英語が実際に話されている国の第二言語としての英語教育がどのようなものか学びたいという気持ちから、派遣留学への出願を決めました。

価値観が変わり、視野が広がる

パヴロスカ●留学当初、戸惑いや不安困ったことはありませんか。

森岡●外国にいたのは幼い時でしたし、小生が使う英語と、大人同士で使う英語は表現などがまったく違うので、最初はそれに戸惑いました。勉強面で戸惑ったのは、リーディングの課題の量やペーパーの書き方、授業のペースです。

井上●僕も書くことには困りました。日本でスベイン語の授業は履修していましたが、話すことはあっても大量の文章を書くことはありません。文は書いてもそれを草立てでまとめる、適切な接続詞や表現を選ぶなど、一つひとつが大変でした。

大谷●私は授業の形態に一番戸惑いました。イギリス系の方法なのでしょうか、4つほどの科目しか登録せず、その授業が週に3、4回ずつあり、うち1つは必ずゼミのような少人数クラスでした。デイスカッション形式なので自分の意見を言わなくてはならぬし、プレゼンテーションも何度もしました。

若葉●授業までの予習の量は、こちらでも半端ではなかったですね。英文学科なのでもちろん英語の論文は読むのですが、向

こうでは加えて批評まで求められますし、プレゼンでも突っ込まれることがとても多い(笑)。

森岡●プレゼンにおいても、ただ何かをまとめて発表するだけではなく、問題を提起して、自分の意見やオリジナリティを混ぜ込まなくてはならない。そこは日本での勉強と大きく異なります。

パヴロスカ●これは前の質問に関係するかもしれませんが、留学で得たものは何でしょう。

森岡●何点かありますが、1つは違う環境に出て行くことによって世界が広がりました。こういう考え方があると知るだけで、自分の世界観がガラリと変わります。

「就職するなら大企業」といった価値観にとらわれなくなり、もっと幅広く自分の人生をどう歩みたいのかという視点でもの

を選ぶことができるようになりました。もう1つは、自分のバックグラウンドである日本のことをよく知ることができたことです。外からは自分の国がどう見えるのかを再認識しました。それから、自分のことをよく知ることができたこと。いろんな人に出会って、多くの困難を乗り越えて、自分の持っている価値観やコンプレックスに気づきました。

井上●僕はこれまでずっと日本語教師になろうと思っていて、3年次には専門学校で資格も取りました。ですが、留学に行ってから、あらゆる可能性を考えて社会経験を積むほうがいいのではと思うよう



井上 晃一さん
【文化情報学部 4年次生】

になりました。これは留学のおかげで視野が広がったためだと思います。

大谷●私も価値観が変わりました。日本から外へ出ると、どれだけ自分が無知だったのかということに気づきます。多様な考えを持つ人々に出会うことで、自分の考え方も変わりました。また、人脈がとても広がりました。世界中に知り合いがいて、困った時に助けてもらえるような関係をネットワークとして持てたことは、これからの人生で活きる宝物です。

若葉●得たものとしては、僕も人のネットワークが一番ですね。英語は学べば学ぼうと疑問が出てきますが、そんな時に頼れる友人が世界中にいるというのはすごく大きなことです。加えて、チャレンジ精神が備わった気がします。帰ってきてからも色々な活動に参加しましたし、機会がないなら自分で作るくらいのスピリットが今の僕にはありますよ。

海外留学生の減少は 日本社会の大きな損失

パヴロスカ●今、海外へ留学する日本人学生は減少傾向にあります。これについてはどう思いますか。

森岡●私の周りに留学したくないという人は少ないです。ただ、金銭面の問題や、就職への懸念であきらめるという人が多い。意欲は高いのに、環境によって断念せざるをえないという状況はとももったいないことです。企業が採用の時期をずらしたり

年間を通して実施するなど、周囲がもう少し考えるべきではと思います。

パヴロスカ●確かに、不景気と就職活動の影響は大きいですね。

井上●海外に行った人はコミュニケーション能力も向上していますし、僕も留学経験者が減ることは日本の社会にとっての損失だと思います。格差が広がりお金がなくて留学できないという状況には、大学や政府が何か手を打つべきです。可能性のある人に挑戦の機会を与えるべきだと思います。

大谷●日本人としてのアイデンティティがないまま海外に出て行く人は、日本人としての意識が薄く、向こうの文化に芯から染まってしまいがちです。それは若い世代の教育にも関係してくると思うので、その点はこのから教師になる若葉さんをお願いします(笑)

若葉●わかりました(笑)。減っていること自体も問題かもしれませんが、それ

よりも僕は留学する時は期間の長短に関係なく、しっかりと目的を持っていてほしいと思います。

政府が留学生を増やそうと奨学金を出しても、遊びに行く人にわたったのでは何にもならない。数が減ったことは懸念材料かもしれませんが、では機会だけを増やせばいいのかというと、そこは少し疑問です。

パヴロスカ●同志社大学が進めている国

際化に期待したいことはありませんか？

森岡●私の印象ですが、来られる留学生の出身国や地域が偏っているような気がします。ただ留学生を呼び込むのではなく、もっと多様性を広げてほしい。そして、同志社にしかない魅力をもっと磨いていってもらえたらと思います。

井上●ここにいるみなさんは外国の大学で正規の授業に参加されたと思いますが、同志社では通常の科目を日本人学生と一緒に受けている留学生をほとんど見ません。ですから、それが可能になる環境をもっと整えることが大事なのではないかと思っています。そのためには、しっかり日本語教育のできる教員が必要です。

大谷●キャンパス内には外国の方の数が増えたと感じますが、では交流の機会が増

えたかという点、決してそうではないという気がします。やはり本で得る知識より、人に会って話して、考えていることを知って得ることの方が自分の中に入ってきたり、影響力があります。そのためにも、あまり積極的でない人でも簡単に交流できる機会があったら、と思うのです。私が留学した大学の例では、国際関係の部署にLLC(ランゲージラーニング・センター)があつて、そこにいる学生たちがランゲージ・バディとして留学生の世話をしてくれます。そこから徐々に友だちの輪が広がっていきますし、そういう場所や制度があればいいなと思うのですが。



大谷 徳子 さん
【グローバルスタディーズ研究科
博士課程(前期)1年次生】

井上●メキシコの大学では、それはクラブ活動のような形で行われていました。大学ではなく、そういう意識のある学生がやるというのも1つの手かなと思います。

若葉●いくらラウンジでイベントをしますなどと告知があったとしても、行きにくい人もいると思います。例えば、広い部屋をランチタイムに開放しているんな国籍の人を集めて食事会をするのもいいし、一度でもコネクションができればそこから広がっていくはずですよ。

目的意識を持って踏み出せば 何かが変わる

バヴロスカ●これも関連する質問ですが、留学について具体的に経験者からこうすればいい、こうしてほしいと思うことはありますか。

若葉●語学研修も派遣留学も経験して思うのは、語学の習得を目的とするなら、語学研修に行くべきだということです。実際、僕が本当に話す力が伸びたと感じたのは語学研修の方でした。派遣留学はアカデミックな内容を学ぶことが主な目的で、英語を話すことはそのための前提です。そこでツールとして英語が使えるレベルでなければ、きつと大変な苦労をしていたらと思うと思います。語学研修を受けるプログラムがあっても、英文文の研修を受けながら、もう一方では英語で論文を書かないといけない。友人の話ではとても大変だったというものでした。

森岡●私は2年次でしたが、多くの方は派遣留学に3年次で行きます。大学には、帰国後の進路に対するフォローアップ、通年採用をしている企業の紹介や推薦など、もっと力を入れていただきたいと思っています。

大谷●私の場合は、留学前に行き先の情報がほとんどない状態でした。留学の先輩や、向こうの大学から同志社に来ている人がいれば話を伺う機会があればと思いました。

バヴロスカ●留学経験者としてこれからどうありたいと考えていますか。

森岡●これから留学したいと思っている人たちの役に立ちたいですね。自分がどんな問題に直面し、それをどう乗り越えたか、どういう経験をしたかを話せるような役割を果たしたいと思っています。

若葉●留学先に行った時、支えてくれる人たちがいて本当に助かりました。ですので、日本に留学している人たちをサポートできる機会があれば、色々な相談に乗っていききたい。また教師として、子どもたちが日本だけでなくたくさんの国に興味を持てるように、伝えていきたいとも思っています。

バヴロスカ●最後に、これから留学を考えている人にメッセージをお願いします。

森岡●留学は、帰国してから何をやるかが大事だと思います。それを見すえた上で、留学先で何をしたいの

かをじっくり考えてほしいですね。

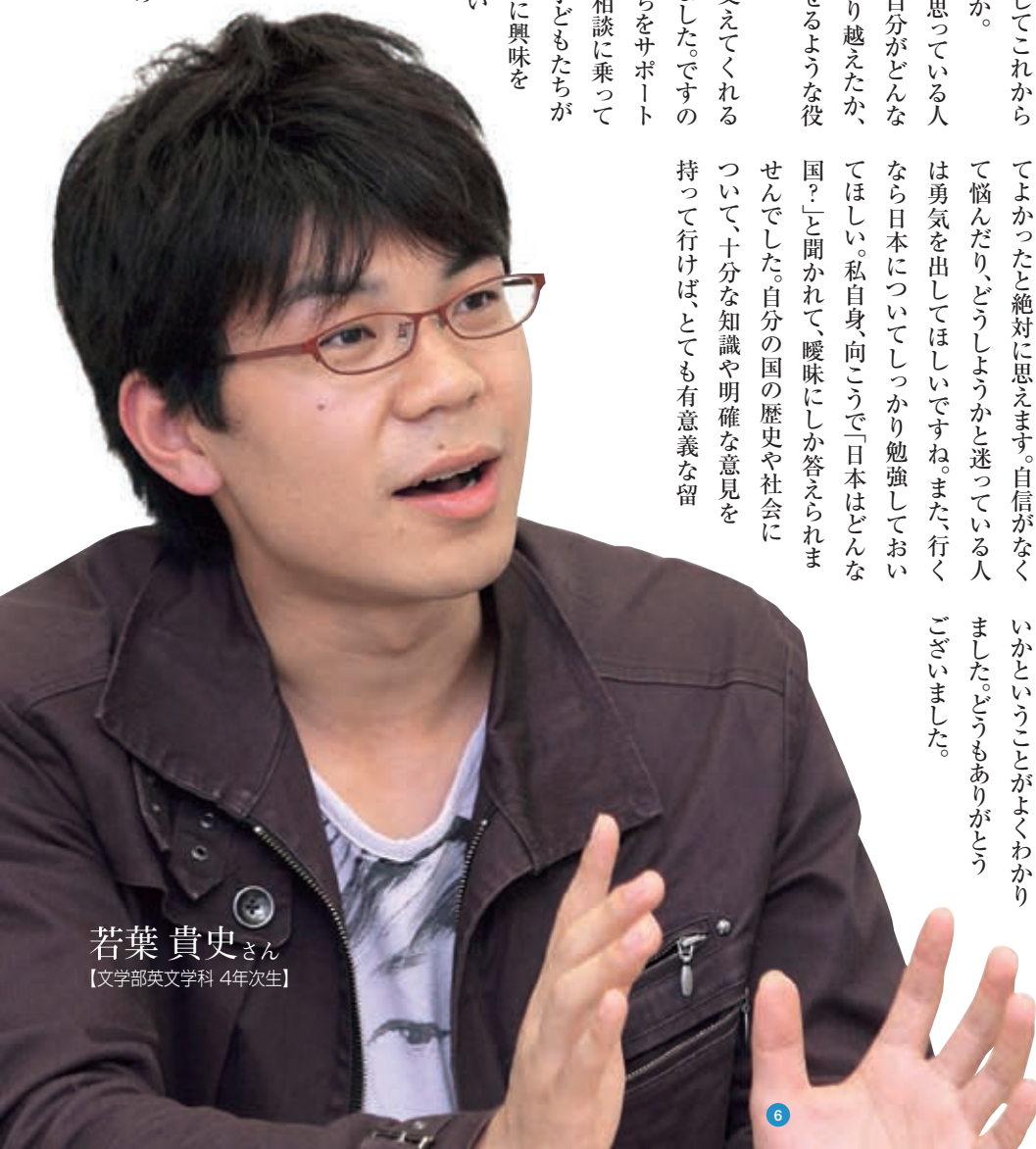
井上●留学先の国について勉強しておくことは大事です。僕もラテンアメリカに関する授業を事前に履修していたので、現地での知識がとても役立ちましたよ。そして、たくさんの人と接して話して体験することを恐れずに、積極的に行動してほしいと思います。

大谷●つらいこともあるかもしれませんが、帰った後で振り返ると、その経験をしてよかったと絶対に思えます。自信がなくて悩んだり、どうしようかと迷っている人は勇気を出してほしいですね。また、行くなら日本についてしっかり勉強しておいてほしい。私自身、向こうで「日本はどんな国？」と聞かれて、曖昧にしか答えられませんでした。自分の国の歴史や社会について、十分な知識や明確な意見を持って行けば、とても有意義な留

学になると思います。

若葉●留学はお金がかかるし、家族のサポートも必要。就職の不安もあって、踏み出しにくいところもあると思います。でも、それでせつかくのチャンスをふいにしてしまうのはすごくもったいない。少しでも興味があるなら、一歩踏み出してほしい。そうすれば自分の何かがきつと変わるはずですよ。

バヴロスカ●みなさんの話をきいて留学することがどんなに素晴らしかったかということがよくわかりました。どうもありがとうございました。



若葉 貴史さん
【文学部英文学科 4年次生】



サマープログラム

外国語を学び、異文化を体験する第一歩

サマープログラムは、大学の夏季休暇期間を利用して外国の大学に行き、その国の言語を学ぶ制度です。英語はいうまでもなく、各初修外国語にもそれぞれのプログラムがあります。しかも、ただ外国語を勉強するだけでなく、正課科目として位置づけられているので、単位が取得できるのです。

私が担当するロシア語では、2000年に第1回を実施しました。以後2年に1回、教員の引率のもと10人前後の学生がサンクトペテルブルク(旧レニ

には、日本語を勉強している現地の学生たちとの交流も組み入れられています。パーティーで友達になり、一緒に観光旅行に出かけたり、自宅に招待されたりすることも少なくないようです。

サマープログラムは2年次から履修できますが、その場合、まだ1年半程度しかロシア語を勉強していません。ようやく初級文法がわかる程度で行くことになりますので、現地の人たちとスムーズに会話をするのはとても無理です。したがってこの3週間は、次のためのステップ、第一歩と考え

ということが少ないからです。若い時に様々な多様性を感じ、いろんな価値観があることを知り、自分の中に取り込んでいくことは重要です。

サマープログラムに参加した学生の多くは、帰国後、勉強への意欲が高まるという話を、他の外国語でもよく耳にします。実際、今年ロシアへのサマープログラムに参加した学生のうち、3人がロシア語の検定を受けました。また、参加した9人の学生全員が、ロシアを好きになって帰ってきてくれました。

ています。初級会話レベルでも構わないので、そこで興味や関心を持ち、次は教員の力を借りずに自力でその国へ行くことを考えたり、より長期間の派遣留学を目指してほしい。それがサマープログラムの意義のひとつだと思います。

たとえ短期のサマープログラムであっても、海外で暮らし、勉強することとは貴重な経験になるはずですが、私はそれをできるだけ若い時にしておくべきだと思っています。というのは、ある程度の年齢になると、自分の価値観がかなり固まってしまっているため、何かを得ても大きく自分が変わる

最初から外国へ自力で行くことも可能ですが、不安な手続きなどはすべて大学に頼り、自分の肌で外国文化を体験できる素晴らしい制度がせっかくあるのですから、利用しない手はありません。費用の問題もあると思いますが、同志社大学では派遣留学促進を目的として、サマープログラムのような短期の留学にも奨学金が出るようになっていきます。もし費用の問題で二の足を踏んでいるのなら、ホームページや資料などでぜひ一度確認してください。

派遣留学に行く ステップとして



田路 真也 さん
〔法学部法律学科3年次生〕

今年からサンクトペテルブルク経済商科大学が協定校として派遣留学制度の対象になったことから、派遣留学への出願を考えていて、その前にサマープログラムでロシアを経験しようとして、この夏に参加しました。

毎日の基本的な会話表現は使えるようになりました。もともと、3週間という短い期間です。ロシア語を勉強するというよりも、その地に行き、触れる機会の少ない異文化に触れたことが自分の中では大きかったと思います。派遣留学に行く意志が本当にあるのか、それを見極める意味もあったのですが、実際、プログラムでさらに決意が固まりました。

就職のことはもちろん気になりますが、それを心配していたら何もできません。それよりもロシアに行きたいという願望の方が強かったですね。来年の9月から再来年の1月まで、念願の派遣留学が決定しました。この5カ月間で語学能力をしっかりと磨きたいと思っています。

たとえ短期のプログラムであっても、せっかく外国語を勉強したのだから、それを試す意味でも留学はしてみるべきです。教室での勉強で終わらせず、実際に現地に行って使ってみる。その意志が重要だと思います。



寄宿舎の前にて、現地の学生と。

本学は2009年度に文部科学

省の国際化拠点整備事業「グローバル30」に採択され、現在、さらなる国際化推進のため各種事業を展開しています。代表的な取り組みとしては、外国での情報収集・広報活動を

念頭においた海外事務所の設置、外国からの留学生の積極的な受け入れが挙げられるでしょう。また、外

国協定大学数は増加傾向にあり、34カ国137大学（2010年6月30日現在）にのぼる大学と大学間協定を締結し、研究者間の交流や学生交換の活性化が期待されています。

国際センターでは「留学」を通じて、本学の教育理念のひとつである「国際主義」を体現できる学生を養成したいと考えています。

「留学」を促進するための取り組みのひとつとして、2009年度から「外国派遣留学促進のための奨学金」を設け、まずは経済的な側面から本学学生の外国への留学をサポートしています。また「TOEFL対策講座」や「TOEFL iTP学内実施」によって語学力の向上をサポートし、一方で過去の留学経験者の協力を得た「派遣留学帰国報告会」も行っています。

実際に「留学」するための制度としては、短期・中期の留学であるサマープログラム・セメスタープログラムや、長期の留学である外国協定大学派遣留

学生制度があり、それらの制度を利用することによって、個々人のニーズにあった留学を在学中に実現できます。本学には多様な学部・研究科が存在し、それぞれに専門性の高い教育・研究が展開されています。皆さんにとって「留学」が、各々の学修計画の中でどのような位置づけになるのかを皆さん自身に考えていただき、限られた学生生活の期間の中で、ぜひ「留学」を学びの選択肢のひとつに加えてください。



国際センター所長 和田 元

同志社大学には、正規学生を対象とした外国派遣留学のための奨学金制度があります。これらは本学の教育理念のひとつである国際主義を体得した学生を養成すべく、皆さんの留学を促進することを目的とした奨学金です。ぜひ、本奨学金制度を活用し、積極的に海外留学に挑戦してください。各奨学金の詳細は次のとおりです。

	同志社大学派遣留学促進のための奨学金		備考
	給付額	申請資格	
サマープログラム/ スプリングプログラム	プログラム費用の2割 (上限7万円)	当該科目において合格評価を得ていること	
セメスタープログラム	一時金25万円	当該科目において合格評価を得ていること	
派遣留学	留学期間6ヶ月未満： 一時金15万円 留学期間6ヶ月以上： 一時金30万円	本学における大学間協定もしくは学部、研究科間協定にもとづく在学留学であること。但し、留学期間が3ヶ月未満の場合は申請不可。	日本学生支援機構留学生交流支援制度（短期派遣）への出願も可能 [支給額:月額8万円/採用人数:若干名]、 但し本奨学金との併給は不可

- * このほかに、認定留学生に対する奨学金があります。上記奨学金についての詳細は、両校地国際センターまでお問い合わせください。
- * 学生支援課奨学係で貸与奨学金の案内(日本学生支援機構第二種奨学金(短期留学))も行っています。

理工学部
電子工学科
佐々木和可緒研究室

自分で考え、 正しいと思つたことは やり遂げる気概を

2008年4月、理学の領域を取り入れた新たな工学教育を推進するため、従来の工学部から改組、新編成の学部として再スタートした現在の理工学部。ハリス理化学校を起源として長い歴史を持つその学部

の中でも、電気系は1949年の同志社大学工学部誕生時以来の伝統を誇る。

佐々木和可緒教授は、工学部時代に電子工学を学んだ1人。ゼミでは「光・電子回路システム」と名前がつく通り、基本的には光エレクトロニクスの研究が主体だ。研究の方向としては、電子回路を使って光エレクトロニクスのスマートな応用を目指す。すなわち、光コンピュータに結びつく電子回路と光エレクトロニクスの融合。具体的にはエレク

トロニクス、光デバイスの非線形特性を活用して、演算回路の作製や精密な光計測のための安定化技術の開発を行う。

ゼミ生は現在、学部生16人と博士前期課程の大学院生19人。研究のテーマごとに3〜4人ずつの10グループに分かれ、テーマに沿った実験を進める。

「実験を伴う研究なので、決まった時間に集まることができません。大概是午後からや3時過ぎなど、院生を中心に相談して集まることができる時に集合して実験をしています。授業を終えてからということもあるので、実験が夜遅くまで続く場合も少なくありません」

通常はグループ別に活動しているため、全員が顔を揃えるのは1セメスターに1〜2回行っている研究発表の時。ただ、最近では就職活動との兼ね合いから、春学期にまだ就職が決まっていない学生の事情も考慮しなければならない。年末に

なると、今度は院生の就職活動が始まる。

「年中就活をやっているようなものです。特に学部生は春学期に大学院の試験もありますし、進路が落ち着かないとなかなか研究どころではないというのが実情です」と、佐々木教授はため息をつく。

教授の言うように、4年次になると、就職とともに大学院進学も選択肢に入る。特に理工学部は平均して半数を超える学部生が博士前期課程へ進むという。

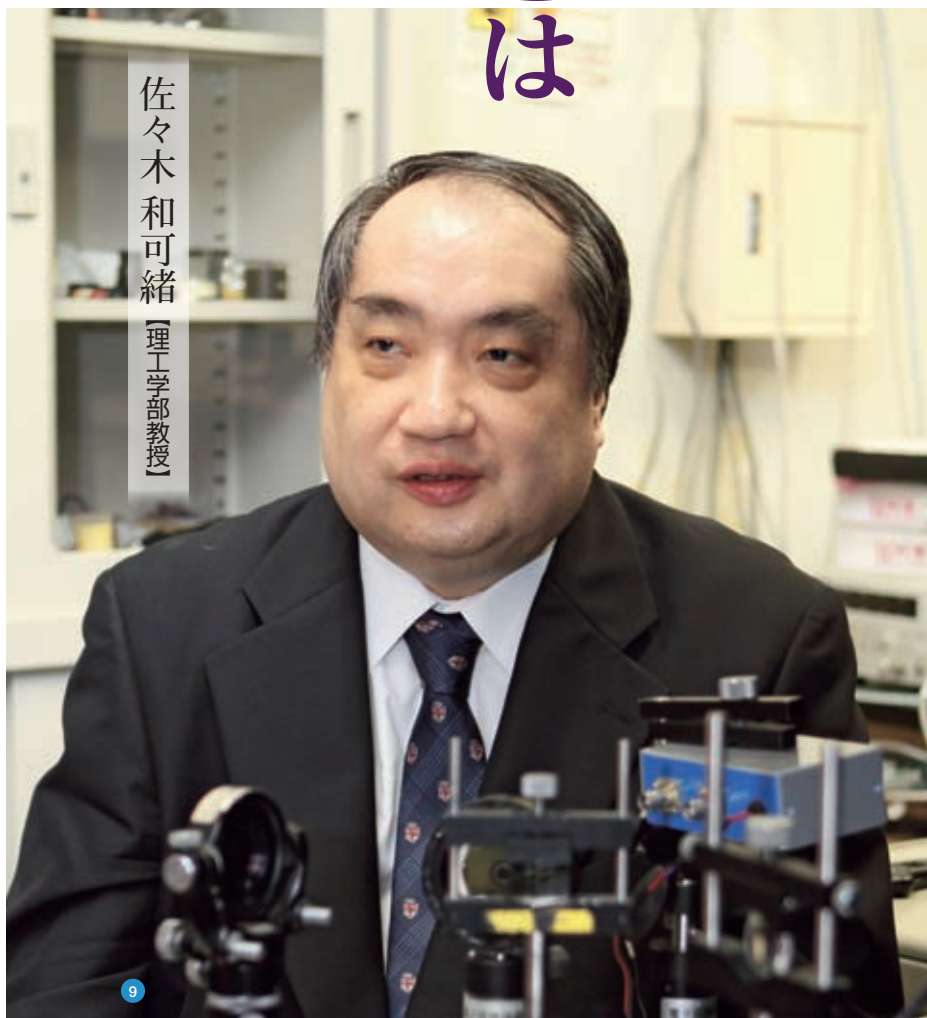
「大学院進学者の増加が目立ってきたのは、特に工学部が京田辺校地へ完全移転した1994年以降。大学院生を増やして科

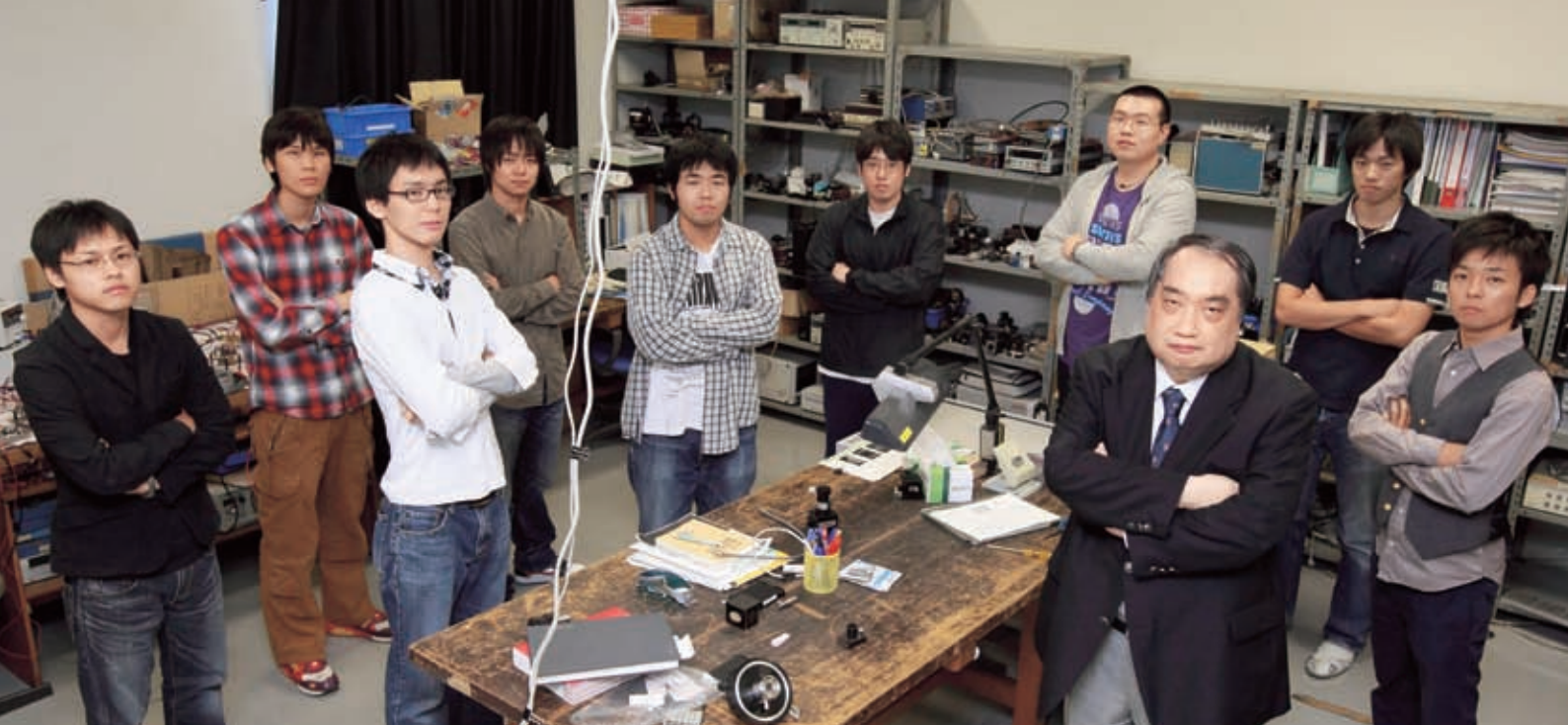
学技術を振興しようという当時の文部省

の方針から、大学が前期課程の定員を増やしたということがあったとはいえ、現在の前期課程1年次生や来年入るであろう新1年次生は、実に100人を超えるような状況です。学部の定員は電気工学科が75人、電子工学科は85人です。電子工学科の学部生の半数以上は大学院に進学しているということになります」

昨今の経済状況も影響しているが、専門知識を活かした技術・研究職への就職は、やはり大学院での研究と知識が不可欠のようだ。

佐々木和可緒【理工学部教授】





「大学院に進んだ一番の理由は就職です」
(松田喬さん／前期課程1年次生)

「4年次で就活をしたものの、企業の方から学部卒では技術職は難しいと言われた」(小西明文さん／同)

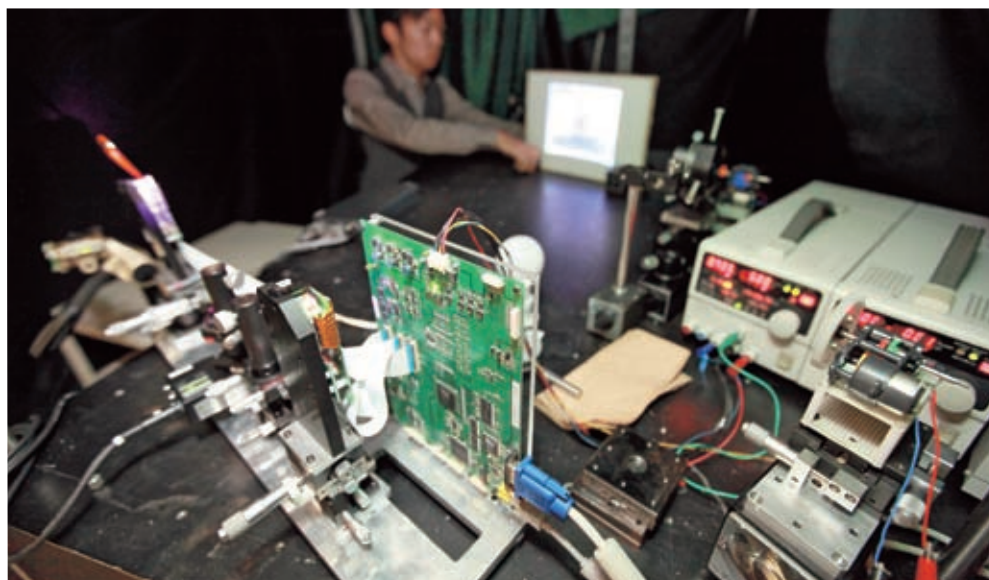
「どうしても行きたい業界があったので、大学院を出てからチャレンジしようと思って」(船越直樹さん／同)

4年次生で来春大学院へ進む井上英樹さんも「先輩の話では、技術職を目指すなら院への進学が必須と言われて」と、小西さんと同じ理由を挙げた。

とはいえ、学部で学ぶのも、大学院で研究するのも、就職は重要なことだが、すべてではないはずだ。

「電気・電子工学科を志望する人には、基本的に電気が好きであってほしい。今は偏差値を基準にここなら行けると決め、何が好きに関係なく、学校の先生に薦められたからという理由で来る人が増えています。家庭用のコンセントが100ボルトだということを知らない人がいるくらいですから。技術が高度化して便利なものはたくさんありますが、みんなブラックボックスになってしまっています。その影響で電気・電子工学科に来る学生ですら、学問領域の基本に対する関心が決して高くない傾向にあります。知的好奇心を持って、なぜそうなるのか、あるいはならないのか、それを自分で見つけ出すことに喜びを見いだすような人にこそ来てほしいのですが…」

苦笑しつつ、教授はこうも言う。



「最近の学生は型破りな人が少なくなりました。ある意味まじめで優秀な人が多いのですが、奇想天外なことをやる学生が少ない。自分で考えついたことは誰がなと言おうとやってやるといふ人は少なくなっています。昔から同志社の工学部には、多くの障害があっても自分が正しいと思うことをやり遂げる、挑戦するという気

風がありました。それは今でも一人ひとりの学生の心の中には宿っていると思うので、ぜひ実行に移してほしい」

一方で、ゼミ生からはこんな声があった。「3年間、実にいろんなことを学べたので、悔いなく就職できます」と言ったのは電気工学科4年次生の田中秀樹さん。前期課程1年次生の松村将弘さんは「より

自分で考えることで、自身が成長できると思ったから」、就職の決まっている2人は「2年間で貴重な経験をできると思って」(中西聡一郎さん／前期課程2年次生)「吸収できることが多いはずと最初から進学を決めていました」(吉見朋晃さん／同)と院進学の理由を語る。中国からの留学生で、長春理工大学を卒業後、日本にやってきた佟琳さんは「同志社で学びたくて来日しました」と、誇らしげに胸を張った。

「学部から大学院と、学問の頂点に迫るにつれて失敗はあるだろうけれど、その経験を糧に新しいことを目指してほしい」

この言葉は、教授が学生たちにかける期待の現れでもある。

多様な研究の融合と産学連携で スポーツ健康科学の可能性を拓く

2008年4月、多角的・科学的な視点からスポーツ・健康を学び、豊かな社会作りに貢献できる人材を育成することを目的に「スポーツ健康科学部」が誕生した。教育と研究、その両輪の1つとして、運動分野のみならず、心理学、栄養学、工学、医学など多方面から研究者が集まり、学部誕生とともに発足したのが「健康体力科学研究センター」。今春から大学院もスタートし、本格的な研究拠点へ助走を開始したセンターの活動状況について、センター長を務めるスポーツ健康科学部・研究科長の藤澤義彦教授に伺った。

藤澤 義彦

【スポーツ健康科学部教授】

充実した社会生活を送る上で、健康であることは基礎的条件として欠かせません。また、生活に質的充実をもたらすという点で、スポーツの果たす役割は大きい。現代ほど健康を重要視し、スポーツを楽しむ欲望が高まっている時代はないと言っても過言ではありません。そんな健康とスポーツへの社会的関心の高まりに対応し、健康・スポーツ分野における高度な知識とスキルを身につけるスポーツ健康科学部の誕生と同時に、研究のための拠点として開設したのが「健康体力科学研究センター」です。

ここでは「健康」と「スポーツ」を切り離さずに、両者を有機的に結合した健康体力科学を総合的・体系的に研究し、健康の維持・増進とスポーツの社会的発展に専門的な立場から貢献することを目的としています。したがって、包括的な研究推進開発を視野に入れ、学内のみならず、学外の研究機関からも多数の研究者を招き、多彩なテーマで研究を行っています。具体的には、大きく「健康科学」「トレーニング科学」「スポーツ・マネジメント」の3分野を柱とし、現在、5つのプロジェクトが始動しています。

例えばその1つは、石井好二郎教授が進めている小児の身体活動量および強度の判定。現役の整形外科医でもある北條達也教授は、体育会アメリカンフットボールチームの選手を対象に調査を行い、下肢の外傷の既往による下肢筋力低下や関節傷

害などの残存が、再度の外傷発生の誘因となるかを評価し、その

具体的要因と対処法等を研究しています。私自身

が関わっている

研究では、京田

辺市消防本部

の方に研究員として参加してもらい、搬送時における救急隊員の身体的負担を軽減する新しい担架の開発を行っているものもあります。

一般企業から研究を委託されたり、最先端の実験機器を共同開発して研究を進める産学連携の取り組みが多いのも、当センターの特徴です。あるスポーツ用品メーカーから、発売前の商品にスポーツ科学的な視点から裏付けがほしいという依頼が来て研究をしている例があります。また下着メーカーからは、開発商品が体に及ぼす効果・影響についての検証を要請されました。時には、その商品に対してこういった意識を芽生えさせれば販売が促進されるのか、購入意欲をかき立てるためにはどんなデザインが有効なのか、などといった相談が寄せられることもあります。

そうした学外からの依頼を含めて、可能性の広がりそうなテーマを各プロジェクトに参加する専任教員を含めた研究員全員が認識し、それぞれの専門分野を中心にしながら横断的に研究を進めること

によって、センターの活動は活発化していきます。センター自体は一応5年で一区切りとなりますので、その期間で成果を出せればと考えています。10年、15年と続ければいかなければ結果が出ないプロジェクトもあります。中間発表でそれぞれの研究の進捗状況、過程の成否を検証して、今後の方向性を見つけ出したいと思っています。今は、いざ他の研究センターのような本格的な研究拠点となる第一段階にあると言っているのではないのでしょうか。



- A: 運動生理学実験室
(海老根 直之 専任講師)
B: 低酸素トレーニング装置
C: ヒューマンカロリーメーター
D: 高性能ガス質量分析装置



最先端の実験機器で エネルギー代謝を研究

人工環境制御室は、温度・湿度をコントロールし、任意に一定条件の環境を維持することができ、空気中の酸素濃度を増減させることもできるようになっている。通常の空気の酸素濃度20.93%を標高5,000メートルの高地に匹敵する10%にまで下げられるため、キャンパスにしながら高地トレーニングに近い体験をすることが可能だ。逆に高酸素状態にすることもでき、低酸素で高い負荷をかけた状態で運動をした後、効率的にリカバリーすることで、これまでにない新しいトレーニング方法の開発にもつながる。

スポーツ選手がどれくらい酸素を取り込みながら運動をしているか、マスクをつけて測定できる装置もある。有酸素能力は持久力に直結するため、トレーニングをステップアップするかどうかの判断に、この呼吸ガス分析は欠かせない。

ヒューマンカロリーメーターは、人間が消費するエネルギーの代謝測定を行う装置だ。室内は柔らかな間接照明で、トイレ、テレビ、ベッドが備えられ、壁には絵画まで飾ってある部屋は、およそ実験室のイメージとはほど遠い。そこへ被験者が入り、循環させた部屋の空気を一定量ずつ室外へ送り出し、中のごく僅かな酸素濃度、二酸化炭素濃度の変化をチェックすることによって、エネルギーの代謝を測定する。さらに、体内で燃焼しているのが脂肪なのか糖質なのかも判定できる。完全に自然な状態でエネルギー代謝を測定できるヒューマンカロリーメーターは、海外の技術を遥かにしのぐ性能だ。

スポーツ動作を測定・解析する バイオメカニクス

がらんとした部屋の天井に数台のカメラが設置され、中央に設置された骸骨模型を撮影している。カメラから出た光が模型についたマーカーに当たって反射、その反射光をカメラが捉えて計測するモーションキャプチャ・システムだ。例えば、野球のピッチャーの投球フォームを撮り、その動きをコンピュータに取り込み、ディスプレイ上に再現する。ボールを投げた時、手首や肘、肩にどれだけの負担がかかっているかを、ここから調べることができる。小学生、高校生、社会人それぞれの動作サンプルを見れば、その違いが明らかだ。大人のフォームが体全体を使いくぐスムーズなのに対し、子どもが使っているのは上半身だけでほとんど手投げに近い。計測した数値を分析すれば、本来望ましくない箇所に、どれだけの負荷がかかっているかがわかる。そのデータを分析すれば、医師が傷害を予防・診断・治療する時のサポートにもつながる。また少年野球の指導者が、個々の子どもへの負担を理解すれば、使いすぎによる障害を軽減できる可能性もある。データを解析し、その結果を発信していくことにより、よりよいスポーツ環境を作っていくこともできるのだ。



図: バイオメカニクス実験室
(中村 康雄 准教授)
図・図: モーションキャプチャ・システム

来年度就職をめざす皆さんへ

豊かな人生のために 充実した学生生活を

就職を取り巻く状況

2010年4月採用の就職率は、前年度に比べ2.2ポイント下回り、96.6%となりました。この10年を振り返っても2001年3月の卒業生の就職率が92.7%という数字から、それ以降の景気回復とともに、2008年3月の卒業生の就職率が99.3%というバブル期を上回る就職状況へと好転しました。しかし、2008年秋のリーマンショック以降の金融危機、輸出産業をはじめとする企業業績の悪化から、採用抑制の傾向が強く、就職率も低下しました。2011年4月採用(現4年次生)においても、企業側に採用に対する慎重な姿勢が見られ、厳しい就職環境が続いています。キャリアセン

ターでは、活動を継続している4年次生や既卒者に対しても、求人情報の提供や相談体制を整える等、就職活動の支援に努めています。経済の先行きに不透明感がある中で、このような傾向は2012年4月採用(現3年次生)においても続くことが予想されます。

採用が抑制される一方で、企業の将来を担う中核となる人材はしっかりと確保したいという意欲を企業は強く持っています。そのような状況において「厳選採用」と言われるように、今まで以上に徹底して質を重視する選考がなされていると言えます。これまでも指摘されてきましたが、早々と複数企業から内定を得る学生と、最終面接に至るものの内定を得られず、長期化を余儀なくされる二極化傾向にあると言えます。企業の知名度のみにこだわったり、特定の業種に偏った就職活動を行ったことに起因するケースも見受けられます。最終的な消費者に目が触れない企業であっても業績を伸ばし、発展している企業も数多くあります。就職活動が長期化した学生も就職活動を進めるうちに自分に合った企業を見る視点

が定まり、最終的には満足のいく就職先を決定しているケースが多くあります。目先の企業選びではなく、自分自身がどのような道を歩みたいのか、就職活動を行うにあたってまずは考えてほしいことです。

企業の求める人材

それでは、「厳選採用」と言われる中で、企業はどのような人材を求めているのでしょうか。経済産業省が、職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」として提唱しています。具体的には、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つの基礎的な能力から構成されると定義付け、その3つの能力を主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール

今年度就職活動をした

先輩からのメッセージ

(2010年度 就職に関するアンケート)から

- 文系男子** 文◆いろいろな就職情報誌やHPが存在しますが、あくまで自分自身の価値観と主観にこだわって就職活動をしてください。法◆就職活動は自分を企業に売り込む機会であり、今後の人生を大きく左右する重要なものです。ただ焦ってなんでも早くからすればいいというものではなく、自分とは何なのか?何がしたい?何ができるのか?などをじっくり考え人に伝えることができれば、きっと道は開けると思っています。世間では就職氷河期などと言われていますが、周りの情報に振り回されず自分を信じて頑張ってください。
- ◆自分を過大評価しない。自分を過小評価しない。まず自分の手と足と目と耳を動かして、汗を流して活動してください。大事なものは「いかに早く、多くの失敗をするか」です。99敗1勝の大金星をあげてください。
- ◆就職活動は今後の人生を左右する分岐点の1つです。しかし、負い過ぎるのではなく、面接等で自然体の自分を出せる余裕を持つことも大事だと思います。自分の自然体が受け入れられた会社こそが、自分に合っている会社であり、今後長く働き続けることができると考えます。経済◆知名度、規模にとられることなく、自分が生涯にわたってどういう仕事に就きたいか、どの会社ならそれが出来るのかを徹底的に考えてください。◆就職活動に答えはありません。自分が決めた道、自分の思い、それが本当の答えになってくるのだと思います。活動中、つらい事、苦しい事があるかもしれませんが最後までがんばったら絶対に何かが見えてきます。頑張ってください。応援しています。商◆とにかく自分の足で情報を集めることが重要です。就職活動はうまくいかないことも多く、つらいこともあります。素の自分を出せば、必ず自分を理解してくれる企業が現れることでしょう。世間の目は気にしすぎず、マイペースで頑張ってください。政策◆就職活動を頑張るのではない。今までの20数年の人生を頑張ってきたものには、必ず結果が付いてくる。●**文系女子** 子◆自分に自信を持ってください!!嘘はつかず、ありのままの自分で勝負してください。きっと自分に合った会社と出会えると思います。就活は自分としっかりと向き合うことのできるチャンスです!!頑張ってください!!文◆あきらめないことが大切。志望する企業から内定をもらえなくても、素直な気持ちで活動を持続

ロール力の12の能力要素別に区分しています。この12の能力のうち最も重要だと考えられる能力として、「主体性」と「実行力」があります。そして、企業が学生に求める能力は「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション力」と言えるかと思っています。多くの企業が国内にとどまらずグローバル展開を図る中で、受身型の人間ではなく、常に周辺を取り巻く環境変化に対応できる柔軟な思考を持ち、自らが考え行動する人物が評価されています。また、グローバル化が進展する中で、社会人基礎力に加え、異文化の理解や語学力を求める企業が増えています。

充実した学生生活を

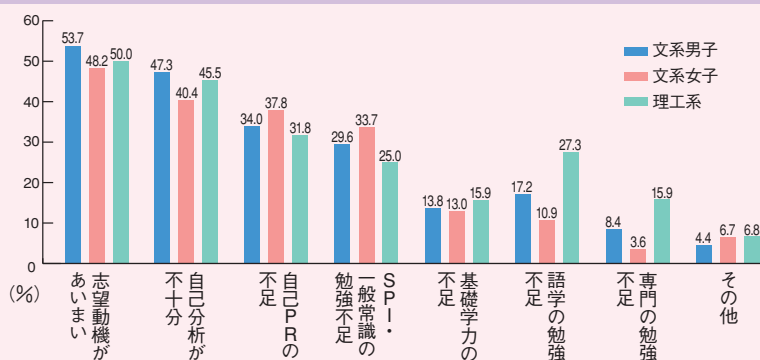
先に述べた社会人基礎力は、どのような身につくのでしょうか。そのためには何事にもチャレンジすることが大切です。授業やクラブ・サークルあるいはアルバイトを含め、自分の興味・関心のあるものを見出し、それに真剣に取り組むことにより達成感を味わったり、逆に失敗や挫折を経験することが一回りも二回りも自らを成長させます。そしてそのような行動をとる中で、自ずと社会に向ける目も広がり、また、多くの人と関わることで「人間力」が磨きあげられます。様々な経験を積み重ねることが卒業後の人生を豊かにするとともに、そのような過程を経た学生

に企業は魅力を感じ、結果として、就職活動における評価にも繋がります。漫然とした日々を送ることなく、常に何かにチャレンジする充実した学生生活を送ってほしいと思います。

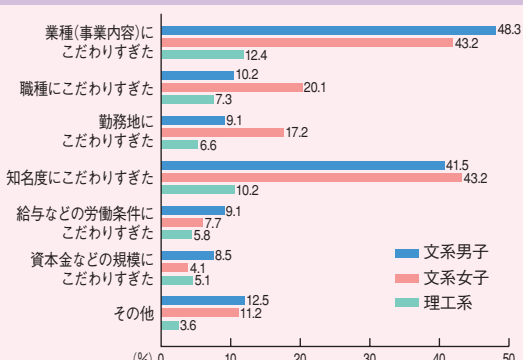
来年度就職を目指す皆さんへ

皆さんが就職する目的は、「社会での自立」「社会参加による貢献」「能力を生かした自己実現」ということになるかと思っています。そのためにはまず、自分自身を知ること（自己理解）が就職活動の第一歩となります。そして自分のやりたいこと、どのような職業で実現できるのか、自分の力がどのように職場で発揮できるのか考えてください。それを考える手段として、OB・OG訪問や企業セミナーへの参加などで幅広く情報を収集することが重要になります。そして業界・企業研究を経て、自分のやりたい職業、働きたい企業を見出し、業務内容をよく調べ、「自分はどの会社でどのように働きたいか」を話せるようにしておくことがポイントです。採用担当者は、面接などのやりとりから、熱意、主体性、コミュニケーション能力、問題意識や行動力を見極め、「一緒に仕事をしたい人物か」どうかを判断するからです。皆さんにとって魅力ある企業は必ず発見できるはずです。自分を信じて前向きに就職活動にチャレンジしてください。

面接・試験段階での反省点



応募先選択段階での反省点



ていれば、運命の会社にきつと出合えます。◆**Now to**にこだわりすぎると、面接で他の学生と同じ事を言うことになってしまったり、自分自身のことが伝えられなくなることもあるため、そういうものは程ほどに。周りの情報にも惑わされないように。◆**経済**◆自分を見つめなおすいい機会だと思います。就職活動を通じて得るものは多いので、日々成長出来ます。どんな出来事も成長への過程だと考え、常にポジティブに考えることが大切だと思います。◆**政策**◆40年先を見据えた就職活動をしてください。自分が10年後、20年後などどこで何をしていきたいかしっかり考えて就職先を決めるべきだと思います。◆**文情**◆本格的に就職活動が始まるまでは、自分のやりたいことを一生懸命やってください。しかし、何かをやるにしても、何を目的にやるのか、自分でもどのように行動していくのか、何を待たれるのか、大変だったこと等、ちゃんと明確に行動することをお勧めします。後は、いろんな企業を見てください。説明会にたくさん行ってください。自分のやりたい事や、就職活動の軸が形成されていきます。自己分析も本当に大切。友達と自分について話したりする時間を多く作ることをお勧めします。最も大切なことは、周りの情報に左右されず、常にマイペースを貫くことです。人は、自分は自分と割り切ることが大切だと思います。◆**経済研究科**◆とにかく足を使って、目で見えて、たくさんのことを聞いて、自分の心に問いかけることを重ねてください。自分がどうしたいか、ということが見えてくると、自然と就職活動も上手にいくはず。◆**理系理工**◆受け身は絶対にダメです。自らが主体となって行動しましょう。あなたをアピールする人は他者ではなくあなた自身ですから。◆サークルバイト、資格の勉強などすることが大事なのではなく、なぜしたのか、何のために取り組んだのか、他人に説明した時に納得してもらえらるほどの思いが大事だと思います。◆なぜその企業なのか、自分のどのような所がその企業とあっているのか、どのような所で自分を生かすことができるのか、ということが明確に言えることが一番大切だと思います。自己分析が何より重要。自分がどんな人間なのか、それを見つめるために、色々な事に挑戦してみることが学生時代に最も必要なことだと、私はこの就職活動を通して実感しました。皆さんも学生時代には様々なことにチャレンジして、自分の可能性を発掘して下さい。それが必ず就職活動、そしてこれからの人生に大いに役立つことになると思います。就職活動は本当に辛いですが、めげずに頑張ってください。